

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 アンナ・ブガエワ,長崎郁
編『アイヌ語研究の諸問題』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ブガエワ, アンナ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000793

アンナ・ブガエワ, 長崎郁 編

『アイヌ語研究の諸問題』

2015年3月 北海道出版企画センター B5判 128ページ 2,500円+税



アンナ・ブガエワ

1. この本の出版経緯・目的

本論文集は、国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」(プロジェクトリーダー: ジョン・ホイットマン, 平成24~27年度)の一環として、アイヌ語研究を推し進めるために設けられたグループ(通称: アイヌ語班, グループリーダー: アンナ・ブガエワ)が、平成25年度と26年度におこなってきた研究活動の成果の一部である。

アイヌ語班は、アイヌ語諸方言の記述、アイヌ語資料の整理・分析・保存、そして言語類型論の観点から見たアイヌ語研究を進めることを目指している。アイヌ語の言語学的研究が開始されてから1世紀以上が過ぎ、その間にさまざまな方言の辞書や文法書・文法梗概が出されてきた。また、言語・文化・口承文芸などの貴重な資料がこれまでの地道かつ丹念な調査により収集されており、その量は極めて豊富である。しかしながら、言語学的研究の全体的な蓄積は未だ不十分であり、精密な記述、通時的側面の解明、言語類型論の観点からの位置づけなど、さらなる研究の深化が期待される。アイヌ語班は、アイヌ語研究を牽引してきた国内の研究者9名(共同研究員)と大学院生を含む若手研究者11名(研究協力者)をメンバーに迎え、これまでに4回の研究発表会、2回の国際シンポジウムにおける研究発表と議論をとおして研究の向上をはかってきた。本論文集に収められた7つの論文は、すべてこれらの研究発表会・国際シンポジウムでの研究発表に基づくものである。

2. この本の構成

本編は次の7つの章から構成されている。

第1章 アイヌ語の合成語のアクセント規則とその例外について(佐藤知己)

アイヌ語の合成語のアクセントを考える上で、CVC語幹が母音で始まる語幹と合成される場合、約8割の例でアクセントが第二音節に置かれる。しかし、第一音節に置かれる例外的な事例も2割ほどあり、その一因が句音調である可能性を指摘した。

第2章 アイヌ語十勝方言における疑問表現のイントネーションについて(高橋靖以)

アイヌ語十勝方言を対象に、文末における非上昇調タイプの出現条件を検討した結果、非上昇調のイントネーションとなる疑問表現は、文末に名詞化を含む場合と、接続助詞に文末詞が後続する場合に限定されることが明らかになった。

第3章 アイヌ語の人称表示における「目的格」の優勢（奥田統己）

アイヌ語の人称表示は一般に「主格—目的格」型として整理されるが、実際にはいくつかの方言において、「目的格」表示だけが出現することがあることを報告し、「目的格」が優勢な状態を起点とする、アイヌ語の人称表示の歴史的な変遷のモデルを提示した。

第4章 アイヌ語における V-V 型の一項動詞（小林美紀）

アイヌ語の V-V 型の一項動詞が名詞化を経て形成されたと見なしうることを示し、切替（1984）における「修飾構造を持つ名詞（句）に由来する構造を持つもの」と、「名詞・名詞」型の構造に由来する構造を持つもの」の二種類に分けられることを述べた。

第5章 アイヌ韻文文学における接続句（遠藤志保）

アイヌ語の韻文文学には日常語とは異なる「雅語（atomte itak）」が用いられている。沙流地方の英雄叙事詩（yukar）・聖伝（oyna）・祈詞（inonnoytak）という韻文ジャンルにおける接続句に着目して、日常語との違いや、ジャンル間の共通点ならびに差異について論じた。

第6章 「数量化3類クラスタリング」の有効性について（小野洋平）

服部・知里（1960）のアイヌ語方言のデータ例に対して統計的手法「数量化3類クラスタリング」を適用した結果、アイヌ語方言のより精密な分類が得られた。また、同手法がデータの相関構造を効率的に捉えるのに有効であることを示した。

第7章 Relative clauses and noun complements in Ainu (Anna Bugaeva)

関係節構文と名詞補文構文を名詞修飾構文としてひとつにまとめて扱う Comrie（1998）などによる研究に対し、2つの構文を、それぞれの標識と「島の制約」（Ross 1967）に関する振る舞いの違いによって、別々に扱う必要性をアイヌ語の事例から主張した。

本論文集は『アイヌ語研究の諸問題』というタイトルに反映されるように、テーマを狭く限定することなく、音韻論、形態論、統語論、アイヌ語史、口承文芸における言語という執筆者個人が現在取り組んでいる問題を取り上げている。したがって、論文集としてのまとまりに欠ける恐れはあるが、国内におけるアイヌ語研究の最新の成果を集めた書物として高い価値をもつものと考えている。

●参考文献●

- Comrie, Bernard (1998) Rethinking the typology of relative clauses. *Language Design* 1: 59–86.
 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『季刊民族学研究』24 (4) : 307–342.
 切替英雄 (1984) 「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』86: 105–121.
 Ross, John (1967) *Constraints on variables in syntax*. MIT PhD dissertation.

アンナ・ブガエワ (Anna BUGAEVA)

国立国語研究所言語対照研究系特任准教授。博士（言語学）（北海道大学）。早稲田大学高等研究所（助教、任期付准教授）を経て、2012年12月から現職。

主な著書・論文： *Grammar and folklore texts of the Chitose dialect of Ainu (Idiolect of Ito Oda)*（大阪学院大学，2004），Reported discourse and logophoricity in Southern Hokkaido dialects of Ainu（『言語研究』133，2008），Ainu applicatives in typological perspective（*Studies in Language* 34(4)，2010），Ditransitive constructions in Ainu（*Sprachtypologie und Universalienforschung* 64(3)，2011）など。